

●読書感想文コンクール 中学校の部●

最優秀賞

宮尾 祥音 (みやお ひろと) 玉名高等学校附属中学校 3年

題名：誰もが「医師」になれる

図書：泣くな研修医

日本中を虜にする野球選手や、世界で活躍するトップアーティストも、最初からプロだったわけではない。どんなに大きな功績を成し遂げる人でも、スタートはゼロからなのだ。

僕は、そんなことを「泣くな研修医」という本から学んだ。僕がこの本と出会ったのは、今年の夏だ。僕は放送部に所属していて、毎年夏には、放送コンテストの朗読部門に出場している。朗読部門の課題図書として僕は、この本に出会った。

「泣くな研修医」は、現役外科医の中山祐次郎さんが圧倒的なリアリティで描いた医療現場を舞台とした小説である。この小説は、雨野隆治という研修医が、自分に降りかかる苦悩や葛藤によって様々な感情を抱き、それを乗り越えながら、医師として、一人の人間として成長していく姿を描いたものである。前に述べている通り、著者が現役の医師だけあって、他の医療系の小説に比べても、この小説では、過酷かつシリアスな現場が描写されている。僕は、著者の経験も豊富に盛り込まれているのではないかと思う。また、生死の間で活躍する医療従事者の命に対する考え方も垣間見えるため、より臨場感が伝わってきて面白い。

僕が小説全体を通して印象に残ったのは、やはり物語が進むにつれて成長していく隆治の姿だ。僕が特に印象に残った場面は、隆治が同じ研修医の川村と会話をする場面だ。九〇代のがん患者に手術をしない件に関して隆治が不満をかかえている場面である。僕は、この場面の「年齢ってだけで手術をしないのは、僕は……嫌なんだよ」という隆治のセリフが心に残った。このセリフには、医師としての「がんを治さなければならない」という責任と、一人の人間としての「手術をしたいが、できない」という苦しさの二面性が表れていると僕は思う。隆治の葛藤がセリフに表れており、成長ぶりが分かるので僕はここが心に残った。後の場面で、隆治は他の患者が死を宣告される瞬間を見たり、自身初となるお看取りを経験したりして、一度は悲しみに打ちのめされてしまう。しかし、僕は、その度に新しいことを学び、突き進んでいく隆治に心打たれた。小説の終盤、隆治が仕事をし出してはじめて良い知らせを聞く場面で、隆治はやりがいを感じる。僕は、隆治の成長を通して、人間は、嬉しいことや楽しいことだけでなく、苦しいことやつらいことも経験していくことでここまで成長できる生き物なのだと感じた。

僕はこの小説から、冒頭に述べた通り、誰でもスタートはゼロからなのだという事を学んだ。僕たちの生活の中には、どこかに必ず他とは違う才能を放つ「すごい人」が表れる。しかし、そんな「すごい人」も、生まれつき持った特別な力か何かではない限り、経験を積んでいるのだ。実際、僕も今まで努力や経験なしに偉業を成し遂げた人物をみたことがない。よく「自分には才能がない」と落ち込んでしまう人がいる。僕も失敗をしてしまったり、何かを始める前から諦めてしまったりする時、この言葉を口にしたことがあるが、大切なことは、才能ではないのだ。僕はこの本を読んで、医者が現場で、僕の想像以上に努力を重ね、患者の前にありつけているということを知った。普段、患者として病院を利用している人間からすれば、医者は、昔から「医者様」と称されてきたように、一般人とは違うイメージを抱いてしまう。しかし、医者もはじめは分からないことだらけの状態だったはずだ。現役の医師も、もともとを辿れば僕たちと同じ学生で学校に通っていたのだ。つまり、「才能がない」と言って嘆く必要はないということである。ただ、僕は全ての人に与えられたゼロという状態をどう変えていくかが重要であると考えます。この本の中で、隆治が成長した理由として挙げられるのは、何度も述べているが、経験と努力を重ねたからである。僕は、それらによって様々な感情を抱き、乗り越えていくことは心にとって刺激となり、それは豊かな人格を作っていくのだと思う。このように、最初はゼロから始まり、経験や努力を重ねて、人は少しずつ成長するのである。

最後に、僕にはある夢がある。それは趣味の作曲を活かし、多くの人に自分の音楽を届け、幸せになってもらうことだ。今回、一冊の本から学んだように、今がゼロの状態と仮定して、今後、様々な経験や努力を重ねて加速していきたいと思う。隆治が医師として、一人の人間として成長したように、僕も憧れの自分に一歩でも近づけるように成長していきたい。